

令和6年度 学校評価報告書 (目標設定・実施結果)

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価 (5月2日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	<p>①生徒の「主体的に学習に取り組む態度」を養うため、授業計画、日課時程の再検討に取り組む。</p> <p>②課題研究の進め方やシチズンシップの視点を取り入れた取組について、研究を進める。</p>	<p>①生徒の学習意欲を高めるため、次年度50分授業の実施を検討する。また、年次進行型セメスター制について、検証する。</p> <p>②課題研究の指導の進め方の見直しを行う。シチズンシップの視点からの授業改善の研究を行う。</p>	<p>①50分授業の実施に向け、日課や年間行事の設定の仕方を検討する。年次進行型セメスター制や、その運用について生徒の学びに生かせるよう、検証する。</p> <p>②外部資源からの情報などをリサーチし、本校にあった活用の仕方を模索する。授業見学会などを通して、シチズンシップの視点の活用を検証する。</p>	<p>①次年度の50分授業の実施を決定できたか。年次進行型セメスター制や、その運用について検証できたか。</p> <p>②外部資源の活用によって課題研究の進め方の改善ができたか。授業見学会を実施し、シチズンシップの視点の活用を検証できたか。</p>	<p>①50分授業の実施を決定し、対外的に公開した。年次進行型セメスター制の弾力的運用を前期行った。</p> <p>②外部講師による生成AIの教育利用に関する研修会を実施した。また、授業観察時の資料にデジタルシチズンシップの視点を記載した。</p>	<p>①50分授業の時程の検討を進める。年次進行型セメスター制の弾力的運用の後期の運用を検証する。</p> <p>②個々の教員が授業や教育活動に活かしてみようと試みることや、そのための働きかけが必要である。</p>	<p>①「自主的に学習に取り組む態度を養う」ための取組を開始したことや、通年開講と併用で年次進行型セメスター制の弾力的運用を開始したことは高く評価できる。 50分授業を実施した場合の科目進度への影響や放課後時間の部活への活用などの影響評価などの検討ができたので、来期での実施に期待ができる。</p> <p>②すべての教育活動にシチズンシップの視点を取り入れることは評価できる。今後ますます期待したい。生成AIの教育利用の研修は大変よい取り組みと 생각합니다。生成AIを活用して学びの質を上げられるような工夫をされるとうるしいのではないかと思います。</p>	<p>①セメスター制の弾力的運用をスムーズに行えたが、もともとセメスター制の導入段階で複数の形態が混在している問題の整理は課題として残っている。 次年度50分授業への移行準備を完了した。移行に伴う授業数確保の実行と定期試験等の時程の精査の必要がある。</p> <p>②多くの教員がシチズンシップ教育のねらいを理解し、様々な形で授業実践につなげていく必要がある。</p>	<p>①セメスター制のより弾力的な運用を検討する。 50授業を実際の授業展開していく上で発生した課題に対して柔軟に対応する。</p> <p>②新たなシチズンシップワーキンググループの構成を見直し、教科が実践しやすい形づくりを行っていききたい。</p>
2	生徒指導・支援	<p>①学校行事や部活動を生徒の視線から見直して充実させ、自己有用感の醸成に結び付ける。</p> <p>②外国につながるのがある生徒への学習支援を含め、SC、SSWや外部機関とも連携した支援を進める。</p>	<p>①学校行事や部活動を通じて、自ら課題を見出し、実現に向けて行動できる生徒を育成する。</p> <p>②外国につながる生徒を含めた、生徒指導・支援体制の整備をすすめる。</p>	<p>①実行委員会や生徒会役員、部活動の生徒が意見を表明する機会を設け、それを生かして学校行事や部活動を運営する。</p> <p>②生徒支援Gや在県WGで、外部機関との連携を生かした体制の整備を進める。個に応じて、組織的に効果的な支援を行う。</p>	<p>①生徒が意見を表明する機会を設けることができたか。また、それを生かした学校行事や部活動の運営ができたか。</p> <p>②生徒指導・支援体制の整備は進んだか。個に応じた組織的で効果的な支援ができたか。</p>	<p>①体育祭や翡翠祭といった行事で実行委員会や中心となる生徒と意見交換をし、生徒の意見を取り入れた学校行事を運営した。</p> <p>②5月・9月・1月にサポートドックを行い、SC・SSWと面談をしたいという生徒のニーズを掘り起こせた。</p>	<p>①生徒との意見交換に時間を要し、その意見に合わせてルールが細分化されたため、次年度は事前にルールを整理する必要がある。</p> <p>②サポートドックの生徒の回答率を100%に近付けるため、LHRの時間を使って回答できるよう計画する必要がある。</p>	<p>①学校行事や部活動は、生徒の意見を反映させることができたのは大きく評価できる。</p> <p>②生徒指導・支援に関しては、必要性が高いにも関わらずSC対応できる時間が十分ではないように見受けられた。サポートドックを3回行い生徒のニーズを掘り起せたが、SC・SSWとの面談実行が時間的に困難であったように思う。</p>	<p>①生徒の意見を取り入れつつ、これまでのルールを整理しながら、より活気ある学校行事の運営を目指していく。 ②ニーズが高くなっている教育相談に対しSC・SSW、スクールメンターの活用や担任等の面談を通じ、困りごとのある生徒を支援していくことができた。課題は、増加する相談に対する準備が必要なことである。</p>	<p>①次年度に向け、部活動や学校行事の場面で地域との連携を進めていけないか検討を進める。</p> <p>②サポートドックや個別面談をさらに活用し、少しの気づきへのこまめな対応を行うことで、早期の改善を行っていくことである。</p>
3	進路指導・支援	<p>①卒業後を見据えて、外国につながる生徒の学習や生活指導体制を整える。</p>	<p>①外国につながる生徒一人ひとりの状況に応じた支援を行い、進路決定を進める。</p>	<p>①外国につながる生徒の進路について、必要な情報や対応策を収集し、個別の課題を解決する。</p>	<p>①外国につながる生徒について、状況に応じた進路指導を行い、3年次生の進路実現ができたか。</p>	<p>①在留資格と奨学金に関する研修会を3年次生とも呼んで実施した。在県枠で入学した生徒の多くが進路目標を実現した。</p>	<p>①学費の課題、生徒の学力とのミスマッチなど、こちらの準備資料では対応できない個別案件が多い。</p>	<p>①国際化が進む中で在県生徒は、今後増加する方向にあると思われる。進路支援であるとともに生活支援でもあり、さらに、外部機関と連携するなど組織的に</p>	<p>①今年の卒業年次生については進路実現ができたが、1、2年次生の支援を行う中で、保護者の理解が不足していることにより、生徒との意</p>	<p>①対称生徒との面談や個別ガイダンスを行い、まず生徒が保護者に自分の進路やその実現方法を保護者に伝えられるようにし</p>

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (3月11日実施)	総合評価(5月2日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
		②生徒が自身や社会の課題に向き合い、解決に向けて学び続ける姿勢の涵養を図る。	②キャリア教育のプログラムの基幹プログラムの充実を図る。	②「産業社会と人間」の新プログラムの遂行とキャリア教育の視点を含んだ「進路ガイダンス」を行う。	②継続的に遂行できる「産業社会と人間」「進路ガイダンス」のプログラムの体系化ができたか。	②前年度取り組みを精選して、 <u>プログラムを展開し、体系化を進めることができた。</u>	②前期に、選択の幅を広げ、自身の学びの選択を考えさせる機会の充実が必要である。	な取組が必要と感じる。 ②「産業社会と人間」での事業所訪問は、総合職系の仕事を理解するうえで大変有用な取り組みだと感じました。訪問してくれた生徒さんたちへのビジネスマナーなどの事前指導も行き届いていたと感じました。	見の乖離が見られた。 ②他校では見られない取組みで、取組んだだけの成果があることは多くの教員が感じている。一方で、学校独自の企画で取り組むことに多大な労力を要していることが実情である。	ていく。 ②グループ以外の力も借りながら、受け入れ企業を開拓していく必要がある。また、同様の取組みを行う外部機関を開拓する必要がある。
4	地域等との協働	①生徒一人ひとりが学校から地域等へ向ける視線を育み、ボランティアや地域等との協働に取り組む姿勢の涵養に取り組む。	①ボランティアの延べ参加人数を増やすことで、生徒が地域等との協働に取り組む機会を増やす。 ②本校の教育活動について地域等に積極的に発信する。また、本校の魅力や特色についての生徒の受け止めに正確に把握する。	①単位取得を目指さない生徒へも積極的にボランティア参加を呼び掛ける。 ②ホームページの更新回数を増やす。また、本校の魅力や特色についての在校生向けのアンケートを実施する。	①生徒のボランティア参加延べ人数を増やすことができたか。 ②ホームページ更新の回数は増えたか。在校生向けの魅力や特色に関するアンケートを実施できたか。	①生徒のボランティア参加延べ人数が増加し、単位申請をする生徒も増加した。 ②ホームページの更新回数を増やすために更新の目安となる指針を作成した。在校生アンケートの内容について検討している。	①後期にはボランティア参加者が減りがちなため、更なる参加の呼びかけをする必要がある。 ②ホームページの更新回数は微増状態であるので更なる発信をしていく必要がある。	①地域との協働は比較的多く行われており、良好な関係にあることが評価できる。また、部活動などによる生徒の積極的な地域活動への参加も、地域の共育フォーラムや青少年育成組織からも好感を持って評価されている。 ②ホームページでの情報発信でも魅力・特色をPRしようとしている。地域との各種連携についても丁寧に発信されているため、新規に地域との共同プロジェクトを企画される際にも地域の理解の方の理解を得られやすいのではないかと感じた。	①長後地域における共育フォーラム主催の「ふれあいコンサート」の開催に関わり、校種間の地域連携をはかることにより横断的な青少年育成の実現に寄与することができた。 ②ホームページの内容についての見直しなど更新作業に着手したことにより、「校内業務の見える化」を進めることができ、地域に果たす本校の役割を再認識できた。	①地域の連携をより一層深めるために、学校運営協議会などで情報交換を行い、地域が期待する「学校像」を学校組織や学校運営に取り込んでいく。 ②総合高校である魅力を積極的に外部に発信し、地域の一人としての期待や要望などをフィードバックし、それに対応できる具体的な方策を検討する。
5	学校管理 学校運営	①総合学科としての多彩な事業に取り組むことを通して、教員の協働性や組織力及び教育力を伸ばす。 ②職場の協働性を育むことを通して、労働時間の短縮に取り組むとともに、不祥事を未然に防止する。	①総合学科教育研究会の事業等とおして、総合学科に所属する教員として教育力を向上させる。 ②成績処理日程の検証を行い、指導と一体化した評価や、その点検を適切に行う。また、教材や評価基準、指導方法などの共有化に取り組む。	①夏季研修会、専門学校見学会、専門学校教職員との研究会、総合学科フェスタへの積極的な参加を促す。 ②作業効率と事故防止の両面から成績処理日程の検証を行う。また、教科や系列での教材等の共有化、アーカイブ化を検討する。	①夏季研修会、専門学校見学会、専門学校教職員との研究会、総合学科フェスタへの参加者が増えたか。 ②成績処理が事故なく、スムーズに行えたか。教科や系列での教材等の共有化、アーカイブ化を検討できたか。	①夏季研修会への参加人数は昨年度に比べ増加したが、専門学校見学会の参加者は夏季休業中ということもあり減少した。 ② <u>成績処理日程を夏季休暇中に調査書作成ができるよう変更し、事故なく進めることができた。</u> 教科等の共有化、アーカイブ化も Google Classroom や Teams を用いて多くの教科系列で取り組めた。	①専門学校教職員との研究会、総合学科フェスタについて今後積極的に参加を呼び掛ける。 ②成績処理日程については、年度末に再び検証する。教材の共有化、アーカイブ化についても、保管場所等について確実に情報共有できるように、確認を進める。	①高校の先生方と専門学校の教員が意見交換する機会は生徒の進路選択の満足度向上に向けた貴重な機会と思います。今後も機会を拡大していただくと専門学校の側も高校生の実態やニーズに合った教育を工夫していくことができると思います。 ②教職員間の協力体制が整っている、また地域やPTAとの連携もとれているように感じる。生徒指導・支援、事故・不祥事防止の観点からも高く評価できる。	①夏季研修会への参加人数は増加し、総合学科教員としての教育力を高めることができた。一方で専門学校見学会および総合学科フェスタへの参加人数は減少した。 ②成績処理の日程は、おおむね適切に運用された。定期試験の日程に関しては在県枠入学者の対応等で無理な状態が解消されていない。教材、成績処理、生徒への指示等の科目内の統一は、おおむね行われた。成績処理に関しては共通の処理を行うエクセルのワークシートの仕様に問題が発生した。	①専門学校見学会や総合学科フェスタは職員への周知の時間が短かったことや、他行事との日程の重なりがあったので、早期に調整を図る必要がある。 ②定期試験の日程、監督システムの見直しを行う。成績処理のエクセルシートのリニューアルを行う。